

4月6日 四旬節第5主日

エシ 31:31～34 ヘブ 5:7～9 ヨハ 12:20～33

1. ヨハ

使徒たちによって宣教され、教会が受け入れて信じて来たイエス・キリストは、十字架にかけられて死に、葬られ、死者の中から復活して神の右に上げられた栄光の救い主であります。

このイエスは御自分の受難を目前にして、「しかし、わたしはまさにこの時のために来たのだ」(v.27) と言ひ、それに応えて天からの声が聞こえました。「わたしは既に栄光を現した。再び栄光を現そう。」(v.28)

地上の生涯でその栄光を現されたイエス(2:11,11:40 他)は、死者の中からの復活によって決定的に父の栄光に入れられたことを、使徒たちは理解したのでした。この使徒たちの理解によってイエスの生涯は解釈され、福音書は宣教の書として編集されることとなりました。

私たちが聖書から神の贖いの福音を聞き取り、イエスの死と復活に神の決定的な救いの行為を見るとき、私たちは“福音にあずかっている”(フィリ1:5)と確信することが出来ます。

「御子を信じる者は裁かれない。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである。」(3:18)

vv.30-31 「この声が聞こえたのは、わたしのためではなく、あなたがたのためだ。今こそ、この世が裁かれる時。今、この世の支配者が追放される。」

十字架と復活の福音は、信じない者にとっては裁きであります。信じる私たちにとっては救いをもたらす神の力(ロマ1:16)です。

2. ヘブ

受肉されたキリストがその地上の生涯において自分を徹底的に低くされ、「多くの苦しみにによって従順を学ばれ」(v.8) たことは、それに続く復活の栄光と結びつけて、使徒たちの宣教の中に組み入れられました。この復活のキリストは地上の教会の歩みを支え導く方であり、やがて終わりの日に再臨される神の国の王であります。

一粒の麦は、地に落ちて死ななければなりません。しかし死んで、否、復活して、御自分の体である教会を贖われ、多くの実を結ぶこととなりました。

このように、教会にとって、キリストの福音からイエスの死と復活の事実を切り離すことは出来ません。その死と復活の光に照らして解釈されない(単なるナザレの)イエスの物語りや教えは、使徒たちが伝えた福音とは違うものです。一部の人々の中にある“イエスの宗教がイエスについての宗教に変質した”という異論への解答は、イエスの復活の後に最初の弟子たちが経験したことの中にあります。それは、イエスの死と復活の出来事は神の贖いの業であったという、復活節における神自らの啓示の行為によって起こった経

験でした。使徒たちの福音宣教はそこから始まりました。

3. エレ

預言者エレミヤが語った「新しい契約を結ぶ日」(v.31)が、イエス・キリストの十字架の死によって実現しました。

使徒パウロは教会に書き送って、「キリストが、わたしたちの過越の小羊として屠られたからです」(Iコリ5:7)と教えました。主イエスは感謝の典礼を制定して、「この杯は、わたしの血によって立てられる新しい契約である。飲む度に、わたしの記念としてこのように行いなさい」(Iコリ11:25)と言われたと伝えられています。私たちのミサは“キリストの血にあずかること”、“キリストの体にあずかること”(Iコリ10:16)であります。

「だから、あなたがたは、このパンを食べこの杯を飲むごとに、主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるのです。」(Iコリ11:26)

四旬節は、全世界の教会が今年も、主の過越の神秘を学ぶ期節です。

アーメン。

4月13日 受難の主日

イザ 50:4~7 フィリ 2:6~11 マコ 14:1~15:47

1.

教会の一年の中で、受難の主日から復活の主日に至るいくつかのミサは、特別に大切にされます。それは教会の宣教の中心が「十字架につけられたキリスト」(Iコリ2:21)であり、キリストの福音は正に十字架の福音だからです。

福音書の中で主の受難の物語りは非常に大きな部分を占めており、使徒たちが伝えた信仰にとって十字架は中心的な事柄でありました。それは受肉された神の子イエスの生涯全体の単なる結末ではなくて、完成そのものであったからです。神の子イエスは十字架の死を遂げるために受肉されました。

2.

受難の数日前、「イエスがベタニアでらい病人シモンの家において、食事の席に着いておられたとき、一人の女が、純粋で非常に高価なナルドの香油の入った石膏の壺を持って来て、それを壊し、香油をイエスの頭に注ぎかけ」(マコ 14:3) しました。主イエスは、神が御計画になったこの十字架の死への備えとして、これを受け入れられました。「この人はできるかぎりのことをした。つまり、前もってわたしの体に香油を注ぎ、埋葬の準備をしてくれた。はっきり言っておく。世界中どこでも、福音が宣べ伝えられる所では、この人のしたことも記念として語り伝えられるだろう。」(マコ 14:8-9)

最後の晩餐の席で、イエスは御自分の体と血による感謝のいけにえを制定され、これを新しい契約として教会にお与えになります。そしてゲッセマネの園で祈った後に捕えられます。「……しかし、わたしが願うことではなく、御心にかなうことが行われますように」(マコ 14:36) と、主イエスは祈られました。

3.

ピラトの裁判とそれに続く十字架の場面は、イザ 50:4-9 の“僕の歌” や 詩 22 を背景にして物語られています。

主イエスは最後の晩餐の席で、「人の子は、聖書に書いてあるとおりに、去って行く」(マコ 14:21) と言われました。そして捕えられたときに再び、「しかし、これは聖書の言葉が実現するためである」(マコ 14:49) と言われます。

イエスはピラトの命令で鞭打たれます。それからイエスは紫の衣を着せられ、茨の冠をかぶせられて、ローマの兵士たちに侮辱されました。

「打とうとする者には背中をまかせ、ひげを抜こうとする者には頬をまかせた。顔を隠さずに、嘲りと唾を受けた。主なる神が助けてくださるから、わたしはそれを嘲りとは思わない。わたしは顔を硬い石のよう

にする。わたしは知っている。わたしが辱められることはない、と。」(イザ 50:6-7)

兵士たちはイエスを十字架につけてから、くじを引いて、イエスの服を分け合いました(詩 22:19)。祭司長や律法学者たちも代わる代わるイエスをののしりました。「他人は救ったのに、自分は救えない。メシア、イスラエルの王、今すぐ十字架から降りるがいい。それを見たら、信じてやろう。」(マコ 15:31-32)

しかし、イザ 50:9には歌われていました。「見よ、主なる神が助けてくださる。誰がわたしを罪に定めよう。」

4.

十字架は決して単なる歴史の中の偶然の出来事ではありませんでした。それは神の業であり、受肉された御子イエスは「へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。」(フィリ 2:8)「ののしられてものしり返さず、苦しめられても人を脅さず、正しくお裁きになる方にお任せになりました。そして、十字架にかかって、自らその身にわたしたちの罪を担ってくださいました。わたしたちが、罪に対して死んで、義によって生きるようになるためです。そのお受けになった傷によって、あなたがたはいやされました。」(1ペト 2:23-24) 私たちを愛して、その御子をさえ惜みせずに死に渡された(ロマ 8:32)父なる神は、「その十字架の血によって平和を打ち立て、天にあるものであれ、地にあるものであれ、万物をただ御子によって、御自分と和解させられました。」(コロ 1:20) ですから、教会の信仰にとって十字架は中心的な事柄です。十字架の出来事から切り離して、私たちはイエスの生涯を解釈することは出来ません。

5.

教会は、洗礼の秘跡によってキリストと共に死に、またキリストと共にその復活の命に生きている者たちの群れです。「あなたがたは死んだのであって、あなたがたの命は、キリストと共に神の内に隠されているのです。あなたがたの命であるキリストが現れるとき、あなたがたも、キリストと共に栄光に包まれて現れるでしょう。」(コロ 3:3-4) 神は御子の十字架によって、私たちに和解の福音を宣言しておられます。

アーメン。

4月20日 復活の主日

使 10:34~43 コロ 3:1~4 ヨハ 20:1~9

1. 使

私たちの主イエス・キリストは死者の中から復活されたという喜びの知らせを、私たち教会は使徒たちの証言を通して聞いています。

vv.40-41 「神はこのイエスを三日目に復活させ、人々の前に現してくださいました。しかし、それは民全体に対してではなく、前もって神に選ばれた証人、つまり、イエスが死者の中から復活した後、御一緒に食事をしたわたしたちに対してです。」

使徒たちは主イエスの証人(使 1:8)、特にその死と復活の証人(v.39)であります。この使徒たち(および共に働く福音の宣教者たち)の証言を土台として、教会は成立しました。ですから、使徒パウロはその手紙の中で言っています。「福音を通し、キリスト・イエスにおいてわたしがあなたがたをもうけた(生んだ)のです。」(Iコリ4:15) 私たちキリスト者は、この使徒たちの証言する十字架と復活のイエスを信じているのです。信じて救われたのです。信仰の喜びと救いの確信を与えられて、一同で主の復活を祝っているのです。

2. ヨハ

福音書が記している主の復活の証言の記録は、人々を説得するために工夫されたものではなくて、初代教会のいわば信仰の告白としての性格を強く示しています。

v.9 「イエスは必ず死者の中から復活されることになっているという聖書の言葉を、二人はまだ理解していなかったのである。」

しかし実際、キリストは死者の中から復活し(Iコリ15:20)、墓は空でありました。この事実の前に使徒たちは圧倒され、「見て、信じた」(v.8)と述べられています。理解したのではなくて、信じたのだ……というのが、初代教会が使徒たちと共有した実感であったことを、福音書は率直に伝えているのです。

現代のキリスト者にとっても、復活祭を祝うということは同様の事柄です。私たちが使徒たちと実感を共有し、使徒たちの証言を通して信じていればこそ、復活祭の祝いは意味を持つのです。東方教会ではこの日、「主は復活された」「本当に主は復活された」と、ルカ 24:34 の言葉を使って会衆が互いに挨拶する習わしであると言われています。私たちは理解したのでも、納得したのでもなく、信じたのです。「見なくても信じており、言葉では言い尽くせないすばらしい喜びに満ちあふれています。」(Iペト 1:8) これが初代教会の信仰、そして今も変わることのない私たち教会の信仰であり、実感であります。西方教会(ローマカトリック教会)では、復活の八日間と聖霊降臨の主日のミサで、通常の閉祭のあいさつの後に、司式者も会衆もそれぞれ“アレルヤ”を加えます。

3. コロ

主イエス・キリストの復活の福音には、この復活されたキリストが生きている者と死んだ者との審判者、また信仰の完成者として再臨されるという終末の使信が、その重要な要素として含まれています。

「そしてイエスは、御自分が生きている者と死んだ者との審判者として神から定められた者であることを、民に宣べ伝え、力強く証しするようにと、わたしたちにお命じになりました。」(使 10:42) 洗礼の秘跡によってキリストに結ばれた(ロマ 6:11)すべてのキリスト者へのメッセージが、ここにあります。

w.3-4 「あなたがたは死んだのであって、あなたがたの命は、キリストと共に神の内に隠されているのです。あなたがたの命であるキリストが現れるとき、あなたがたも、キリストと共に栄光に包まれて現れるでしょう。」

ですから、私たちのミサの中の交わりの儀で、一同が主の祈りを唱和すると、司祭はその副文の中で唱えます。「わたしたちの希望、救い主イエス・キリストが来られるのを待ち望んでいます。」私たちキリスト者は「体の贖われること」(ロマ 8:23)、すなわち神の国への復活の日を待望しているのです。

「しかし、実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となりました。」(I コリ 15:20) ハレルヤ、アーメン。

4月27日 復活節第2主日

使 4:32～35 1ヨハ 5:1～6 ヨハ 20:19～31

1. ヨハ

vv.20-21 「そう言って、手とわき腹とをお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。イエスは重ねて言われた。“あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。”」

初代教会の理解によれば、使徒とは次の二つの意味でキリストの証人となった人々でありました。先ず彼らは、ヨハネの洗礼から始まって、主の復活と昇天に至る歴史上の出来事を目撃者でありました(使 1:21 以下参照)。言うまでもなく各々の使徒がすべての出来事を目撃者ではありませんでしたが、彼らは互いに他の使徒を頼りにすることによって、主の復活の証人としての“使徒団体を構成(教会憲章 22)”していました。第二に使徒とは、復活の主御自身から直接福音を委ねられ、これを宣べ伝えるために派遣された人々でありました。

この使徒たちによるキリストの福音の宣教こそが、キリスト教の起源であったという非常に明確な事実を、現代のキリスト者は自ら聖書を読むことによって理解することが大切です。彼らの福音理解は彼らが自分自身で考え出したものではありませんでした。そうではなくて復活の主が彼らに現れて、彼らにキリストの福音を理解させ、これを宣べ伝えるために彼らを派遣したのです。ですから聖書の記述に従えば、復活祭から聖霊降臨祭に至る非常に短期間に使徒たちによるキリストの福音の宣教内容が形成され、最初の共同体が誕生したのでした。

2. 使

v.33 「使徒たちは、大いなる力をもって主イエスの復活を証しし、皆、人々から非常に好意を持たれていた。」

教会は、この使徒たちの宣教の上に建てられました。その後の歴史の教会が展開して行った福音宣教にとっても、使徒たちは復活のキリストによって権能を与えられた目撃証人として、特別な位置を占めています。なぜなら使徒後の時代の教会の宣教は、使徒たちから受け継がれたものであって、その規範は常に最初の使徒たちに属しているからです。

2世紀の教会が新約聖書正典を編纂した重要な動機の一つは、このような使徒たちの宣教の規範性を保つことでありました。神の啓示に関する教義憲章(10)は、現代の教会が“使徒たちから伝えられたこと”を知る正当な手段を説明して、これを聖伝と聖書に限定しています。

3. 1ヨハ

教会はその誕生のときからミサを共にささげる群れでありました。ヨハネ福音書とヨハネの手紙が特に強調している「互いに愛し合いなさい」と「わたしの掟を守るなら」という言葉は、いずれも共にミサをささげる共同体の形成を指していると理解すべきです。

ミサは、「キリストの業を現在に移すもの」(O.クルマン)であって、それは使徒の時代にもその後の時代にも区別なく永続するものです。キリストは「御自分の死をもってわたしたちの死を打ち砕き、復活をもってわたしたちにいのちをお与えになった。」(典礼暦年と典礼暦に関する一般原則 18) 「十字架のいけにえと、ミサにおけるその秘跡的再現は、奉獻のしかたを除けば同一のものである。」(ミサ典礼書の総則 前文 2) そして聖霊はこのミサにおいて、信者に神のこぼしの食卓の富を豊かに与えるために(典礼憲章 51)、また私たちがキリストの御からだと御血に共に与かるために働いてくださいます。

4.

このような教会を生み出したものは使徒たちの宣教でありました。それは最初からイエス・キリストについての宣教であり、救いの福音でありました。

現代の教会の宣教も、イエス・キリストの出来事についての使徒たちの証言の継続であって、その宣教に欠くことの出来ない要素は、その出来事の証人としての使徒たち自身であります。神は今も私たち現代の教会に、聖伝と聖書が伝える使徒たちの証言を通して語り続けておられます。

「これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。」(ヨハ 20:31)

アーメン、ハレルヤ。